

浄土 monthly JODO

2023

September
vol.89
no.976

法然上人葬仰会 第89巻 976号

法 然 上 人 葬 仰 会

令和5年

通巻976号

浄土

変

近現代浄土宗の歴史①

明治維新と浄土宗 吉田淳雄

微風吹動

凡夫最適化デザイン 工藤量導

特別寄稿

釧路・大成寺探訪記 赤坂明翔

法然上人葬仰会

浄土

2023/9月号 目次

近現代浄土宗史 第1回 明治維新と浄土宗	吉田淳雄	2
林海庵・開教奮闘記⑫ 林海庵のお墓	笠原泰淳	9
ぶつぶつ放談 他宗を知ろう「時宗」その2	長澤昌幸	14
『選択本願念仏集』講義余話3回「法蔵」菩薩の俗名	阿満利麿	24
寺々刻々⑬ 寺院とホテルの一体型モデル	鶴飼秀徳	28
漫画「浄土宗のお祖師様」四祖良暁上人 第1回	…ぐんじまん	32
みんなの境内 廣度院練堀公開	西城千珠	35
微風吹動 幸せのデザイン	工藤量導	36
あなたもお寺のCIO⑯ ツイッターの過去と現在	小路竜嗣	40
特別寄稿 釧路・大成寺探訪記	赤坂明翔	44
写仏シリーズ 個別販売のお知らせ	編集部	47
編集後記		48
心に響く言葉⑤	長谷川岱潤	表2



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙絵=貞林院瑞正寺二十五世 林錦洞「呼」金文文字

アートディレクション=近藤十四郎

林海庵のお墓

林海庵開山上人

笠原泰淳

かさはら たいじゆん

昭和三十三年東京生まれ。慶応大学経済学部卒。
日本通運(株)に入社、八年勤務し浄土宗東京
教区貞源寺の故藤木芳清師に師事。佛教大学に
学び、浄土宗僧階取得。東京教区心光院に約十
年勤務。平成十四年「林海庵」を設立。翌年、
同寺が浄土宗寺院として承認され住職となる。
現在、浄土宗開教振興協会副理事長。

林海庵近くの霊園に建てた林海庵のお墓



すつたもんだの末、何とか宗教法人を設立することができた。

開教寺院の次の課題は……お墓である。

林海庵を開いてから、お墓の相談を多数受けるようになった。改葬の相談、新しくお墓を建てたいという相談だ。

「林海庵さんには墓地はないのですか。」

よく聞かれるようになった。

「ご覧の通りの小さな寺で、墓地はございません。この近く（東京多摩地区）には霊園墓地がたくさんあります。ご自分で足を運び、気に入ったところをお求めになって下さい。」

これが私のお決まりの返答であった。場合によっては霊園の見学に同行することもあったが、まさにこの返答通り、せいぜい霊園の紹介をすることくらいしかお役に立てないのだ。

だが、そう答えながらも（少し無責任ではなからうか、何とかできないものだろうか）という思

いは常にあった。

墓地用の土地を購入するというのは予算上、土台無理な話であった。可能性として考えられるのは、共同墓の建立だ。

来客用の駐車場をなくして小さなお墓を建てたかどうか——このようなアドバイスも頂いた。物理的には可能であったが、そうすると駐車場として使えなくなるし、そもそも住宅地であるので墓地新設の許可がおりの見込みはほとんどない。

都立の多磨霊園はどうだろうか。園内にはキリスト教会や他の宗教団体の共同墓も見かける。寺からも車で三十分程度で行ける。都立であれば経営的にも心配なからう。東京都公園協会に問い合わせたところ、「現在は、新規では個人にしか使用を認めていない」とのこと。残念。

次に民間の霊園を当たる。寺から車で十五分ほどの霊園が第一候補だ。所長に相談したところ、快く引き受けてくれた。霊園の一区画を、一般の

方がお墓を買うのと同じように永代使用料を支払って使用する。すでに宗教法人になっているので、法人として契約することができる。しかも都合の良いことに、寺の境内地を広げるわけではないので、宗務庁の承認も公告の必要もない。寺の責任役員会の議決があれば、それで事足りる。

早速話を進めることになった。

区画が決まり、次はどのようなお墓を建てるか、石やデザインを決めてゆく。

基本とするコンセプトは、「お参りしたくなるようなお墓」である。

まず、お墓参りをするときに、林海庵の本堂でお参りするときと同じような落ち着いた感じ、ありがたい感じをもてるようにしたい。

ご本尊を前にしたときのような厳肅さ、居心地のよい安心感、自然に手が合わさるような敬虔の念……。そこで、中央の石塔は丸みのある自然石

にしてあたたかい感じを出し、本尊さまになぞらえて中央に「南無阿弥陀仏」と刻むことにした。六字名号の右左には、林海庵の庵号「林海」に通ずる「願共諸衆生」「往生安樂国」を刻もう。

以前書いたが、「林」は檀林の林、すなわち念仏者の集いを表し、「海」は「願海」、本願による広大な救いの世界を表す。ご一緒にお念仏を称え、いつかは共に極楽浄土に救われて参りましょう、という意味を「林海」の二字に込めている。

お墓の外柵を少しだけ高くして、お参りするときに落ち着いた気持ちになれるようにする。外柵の内側には、「〇〇家先祖代々之霊」と刻んだ黒御影のプレートを並べる。位牌壇に位牌を安置するような具合だ。

また、石の椅子を据えて、ゆつくりと腰掛けて先祖と対話できるようにする。

お墓を建てる霊園は、寺から見てもちょうど真南の方角に位置する。お墓参りするときに真北に向

かつて手を合わせるような方角にお墓を配置すれば、林海庵ご本尊に向かつて手を合わせる形になる。(通路との位置関係から、西向きにお参りする配置にはできなかつた。)

「お参りしたくなるようなお墓」ともう一つ、さらに重要なコンセプトは、「自分が入りたくなるようなお墓」であつた。

お墓が完成すれば、まず私自身の先祖代々の遺骨を改葬する。将来は自分(の遺骨)も入る。檀信徒の皆さんにそのようにご案内したい。

「この世ではご一緒にお念仏を称えましょう。お墓の中もお浄土でもご一緒ですよ。どうぞ末長くお付き合ひ下さい」——このようにご案内できるお墓にしよう。

まず、納骨室を三つに分けた。左右が骨壺で納めるスペース、そして中央が遺骨を土に還すスペースだ。納骨時は骨壺で納められるが、七回忌

を過ぎたらいったん骨壺を取り出し、遺骨を細かくしてから土に還して頂く。

この土に還す中央部分、カロートの蓋の部分を石にせず、強化ガラス製にした。この墓は、カロートを地上に設置するタイプの墓なので、蓋の部分はいわゆる拝石ではなく、垂直に置かれる。お墓の中にはガラスを通して明るい光が入ってくるし、外からガラス越しにお墓の中を覗くと、最後に納骨した白い粉末状の骨を見ることが出来る。いわば、肉体の行く末を直視しながら、お参りできるわけだ。

ちょうどお墓の南方向に枝垂れ桜が植えられており、お墓のすぐ裏には紅葉がある。お墓に入つた後も、春は桜、秋はもみじ葉を楽しむことができる。

また日光の具合で、時おり粉骨を撒いた土の部分にガラスを通した七色の光が映る。(これは前もって意図したわけではないが。)お墓に入つて

からも、時に「ああ、今日は虹色の光がさしてきて綺麗だ」と喜ぶことができる。

不謹慎な言い方になるかもしれないが、こうして楽しみながらお墓作りの仕事をさせて頂いた。お参りしてよし、入ってよしのお墓がこうしてでき上がった。

協力してくれた石材会社にはとても感謝している。幾度も幾度も打ち合わせを重ね、他の霊園も見学させて頂き、茨城の工場にも連れて行って頂いた。私のわがままにとことん付き合ってくれたのだ。

この新しいお墓をそのまま「林海庵のお墓」と名づけ、檀信徒の方々を招いて竣工式を行う予定であった。法然上人八百年大遠忌の年だ。林海庵としてのささやかな大遠忌記念事業である。

だがこのお祝いはできなくなった。平成二十三年のこの年、東日本大震災が起こった。

日本全体が、そして自分自身もショックと悲しみ、不安に沈む中ではあったが、一方で少しずつこの新しいお墓に関わる仕事を進めていった。まずは、自身の先祖の遺骨の改葬である。

改葬の手続きも、自分で行うのは初めてだ。ちょうど亡き母の三回忌にあたる年だった。母の遺骨も他の先祖と一緒に、土に還すことにした。

菩提寺のお墓から出してみると、どの骨壺の中にも水が溜まっていた。水を切り、新聞紙の上に遺骨を広げて数日間乾かす。全部で八壺、ひとつづつの作業だ。乾いたところですり鉢、すりこぎを使って遺骨を細かく砕いてゆく。両親の遺骨も粉にしてゆく。手首が痛くなる。そして独特の匂い。

感慨深い経験であった。